

一休とんち大賞 応募作品集



前書き

一休とんち大賞応募作品集にようこそ！

一休とんち大賞とは、一休和尚が京田辺市で晩年をすごしたちなみ、京田辺市観光協会が庶民的で風刺とユーモアを溢れる作品を募集している賞です。

部門は「こばなし」「随筆」「川柳」とありますが、この作品集では一休とんち大賞のメインともいえる「こばなし」部門に挑戦したものの、惜しくも敗れ去った作品を集めています。

いまからでも遅くはありません。第21回一休とんち大賞に応募された方は、ぜひとも連絡をください。いつでもウェルカムです！ もちろん来年も作成しますので、今年は応募しなかった方もいまからてぐすね引いてネタを暖めておいてください。

それでは、刀おれ弓矢尽きた勇者達の夢のあとをご覧あれ！

（表紙絵は漫画家アシスタント経験者で、漫画家デビューを目指して奮闘中の常夏さわやさんです。素晴らしい絵をありがとうございます！）

参加者

【おなら出ちゃっ太】

HP：<http://onara931world.at.webry.info/>

【田磨香】

HP：<http://orokanaruqdosya.blog47.fc2.com/>

（※18禁です）

【齊藤想】

HP：<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/>

【常夏さわや（表紙）】

HP：<http://sawayatoko.exblog.jp/>

おなら出ちゃっ太『直感的に使えるパソコンソフト』

「おなじみのパソコンソフトが新しくなりました。直観的に使えるのでカンタンです！」

パソコンソフトメーカーの店頭宣伝だ。

客の中から、一人の老紳士が声を掛けた。

「直観的に使えるとは？」

担当者は得たりとばかりに、

「昔のパソコンは難しい命令をキーボードから入れるので、なかなか使えませんでした。今は画面を見るだけで、使い方が分かります」

「ほほう、そんなに簡単になったのか？」

「そうです、見たままの操作でインターネットも表計算も、思いのままです」

「それはすごい、ところでもうひとつ尋ねていいかな？」

「どうぞどうぞ」

「そのパソコンソフトは直観的に使えるのに、どうしてあっちの書籍コーナーには解説本がたくさん出ているんだね？」

おなら出ちゃっ太『台風の日』

台風で、幼稚園では園児を早めに帰します。たいていは幼稚園バスで帰りましたが、おうちの方がお迎えに来る子は、先生のまわりに集まっていた。

空が暗くなり風も強く吹き始めました。風の音は大きく、幼稚園がゆれるようです。

「先生、こわいよう」

子どもたちは泣き出しそうでした。でも、先生はニコニコして言います。

「うーん、なんだか面白いねー」

「何がおもしろいの？」

「遊園地で乗り物みたいなもの。ほら、暗くなって大きな音がするでしょ？ あれあれ？ 幼稚園がちょっとゆれてる？ 今に動き出すかもよー、みんなのおうちまで行けるかなー」

怖がっていた子も大喜びで、遊園地の乗り物のお話に夢中でした。お迎えに来たおうちの人びびっくりでした。

おなら出ちゃっ太『大風の日ランチ』

ランチに入った店は、なぜだか照明が暗い店。しかもその日は風が強くて、店の中にも風の音が耳を圧するようで、おまけに店そのものが揺れるようにも感じられた。

「暗い中で風の音を聞いて、しかも建物が揺れているなんて、まるで漂流のようだ」

「台風で避難所に閉じこめられたみたいだ」

皆が愚痴をこぼす中、A子だけは楽しそうに笑いながら、こう言った。

「なんだか遊園地の乗り物みたいだね、周りが暗くなって大きな音がして、ちょっと揺れたと思ったら動き出して冒険の世界に行く、みたいな。うん、乗り物みたいで楽しいよ、ほら、今に動き出すよ」

何事も楽しめるタイプのA子の発言に、一同は笑い出してしまった。気の持ちようで、漂流や避難生活が、遊園地の乗り物に変わるのですから。

「綺麗になったね」

私にそう言ってくれたのは、中学校のとき好きだった渡辺君。

同窓会で卒業以来十年ぶりに会った彼は、すっかり大人っぽくなっていた。

昔は落ち着きがなくてお調子者で、同級生の中でも一段と子供っぽかったのに。

だから私が、「渡辺君は、凄く大人になったね」と思ったままを伝えると。

「うん。大人になったよ、俺——社交辞令が言えるくらいにはね！」

そう言って、ニカッと笑った渡辺君は、あの頃のままでの笑顔だった。

あっ、この子ったらまたピーマン残して！

「こら。ちゃんとピーマンも食べなさい」

「ええー。やだよー。ピーマンきらいー！」

「あのね、世の中には、食べたくても食べられない、貧しい子たちがいっぱいいるのよ。お腹を空かして辛い思いをしてるその子たちに、申し訳ないと思わないの？」

「えっ、そんなかわいそうな子たちがいるの？ そうなんだ……じゃあ、ボクは……」

途端にシュンとしちゃって。そうそう。ちょっとわがままだけど、根は素直で優しい子なのよね。

「うん。わかったよ、おかあさん！」

「良かった。わかってくれたのね。お母さん嬉しいわ。じゃあちゃんとピーマン食べー」

「ボクはたべものにこまってないしあわせな子だから！ このピーマンは、そのかわいそうな子たちにあげてよ！」

……それはもうニッコリと、お日様みたいなしたり顔だった。

ぼくは昭和四〇年に生まれました。年齢だけでオヤジだなんて言わないで。まだまだ成長期なんだからさ。

産まれてからこの年になるまでいろいろあったけど、ぼくのおかげで、みんなとっても助かっているとよく言われるんだ。なんか鼻が高くなっちゃう。

それにしても、このぼくのことだけど、最近になってますます成長が早くなったねとみんなに驚かれるんだ。あまりに大きくなりすぎて、日本だけじゃなくて世界中から心配されているみたい。いやだね、本当に。みんな子供に「大きくなれよ」と言って頭を撫でるのに、ぼくだけ違うのかな。そんなことないよね。ぼく、まだまだ育ち盛りだもん。

え、ぼくの名前？

名前は”赤字国債”っていうんだ。ぼく、これからもっと成長するみたいだから、みんな温かい目で見守っていてね。

あの三・一一には驚いたわよ。

私の町は震源地からあんなに離れているのに大きく揺れて、しかもテレビをつけると原発が爆発して大騒ぎ。セシウムやら、液状化現象やらで断水するし、道路は波を打っているしで、もう日本はダメかと思って食事も喉を通らなかったわ。おかげで体重は激減よ。

良かったじゃないって、失礼ね。

一年が過ぎ、ようやく私の町は徐々に落ち着きを取り戻してきたわ。東北の方々には申し訳ない気持ちもあるけど、おかげさまで普通に生活できるようになって、私の町は見事に復興を遂げたの。

え、激減したはずの私の体重はどうなったって？

本当に失礼な人ね。町の復興と何の関係があるのよ。体重の件は、見ての通り、こちらも見事に復興したわ。安心した途端にご飯の量が増えて止まらないの。これで今回の話はお終い。なんか文句ある！

「使い込まれたものというのは、独特の味わいがあるからね」

と紳士が軽い口調で言うと、淑女も同意するように言葉を繋いだ。

「そもそも、新しいのがいいとか、手垢がついていないのがいいとか、そういう古い考え方にはうんざりなんです。だから、貴方のような、新しい考え方を持つひとに惹かれたのかもしれない」

淑女はワインを飲み干した。そろそろあいと見た紳士は、一気に畳み掛ける。

「ぼくも香さんと同じく、過去は気にしない人間なのです。3度の離婚歴がなんだというのですか。だから、離婚歴のある……つまり、使い込まれた風合いのある大人同士、幸せな結婚をしませんか」

プロポーズを聞いた淑女は驚いた。

「残念ですけど、私、離婚歴のある男性はご遠慮しているの。中古しか選べない女性とされているなんて失礼な！」

「人民の口に入る食品は、徹底的に安全でなくてはなりません。食中毒の恐れがある生レバーは禁止です。ユッケも厳しい基準に適合させなくてはなりません。もちろん、危険は食中毒だけではありません。こんにゃくゼリーは原則禁止、餅なんてものは論外です。

食事とは健康増進のためにあるものです。肉類の食べすぎはメタボを誘発します。魚類にしても海洋汚染が心配です。腹八分目といますが、少し足りないぐらいが健康面には一番いいとの科学的根拠もあります。

つまり、絶対的かつ理想的な健康国家を実現するには、人民の食物を政府が管理し、決定しなければなりません。それこそ、わが国、わが人民のためであり、強盛強大国家への道なのです」

こうした将軍様の無限なる慈悲により、某国ではあえて控えめな配給制度が実施されているとの噂はあるが、真偽は定かではない。